

酪農の未来をみんなで語り合う場「USHINOBA」



5組の酪農家と元教員でつくるUSHINOBAメンバー

酪農乳業界の価値や魅力を語り合い、未来を創造しようというフォーラムが今年3月、東京都内で初めて開かれました。主催したのは、若手酪農家の有志でつくる団体「USHINOBA（ウシノバ）」で、「牛を通じ

て、人と人がつながる場をつくりたい」という願いが込められています。Jミルクの協力のもと、会場には乳業関係者、研究者、会社員、学生など70名が集まりました。

発起人は千葉県館山市の須藤牧場で農場部長を務める原正則（43）さん。会社員をしていますが、北海道で牛と出会ったことをきっかけに酪農の世界に魅了され、夫婦で全国の牧場を訪ね歩きました。「うし活」というコミュニティを作り、牛グッズを制作販売するなど、酪農家の間でも知られるほどの牛マニアとなり、ついには牧場に就職したという異色のキャリアの持ち主です。

酪農の価値を伝えるには？

参加した酪農家はみな40代前後。ウシノバのメンバーです。北海道標津町、Happy Land安達牧場の安達



牛好きが高じて千葉の牧場の農場部長になった原正則さん

永補さんと真子さんは、地域の小中高校と連携して酪農教育を行うほか都市農村交流にも取り組んでいます。富山県高岡市、clover farmの青沼光さんは地域の資源循環を実践し、酪農をコミュニティづくりの柱に社会課題の解決をめざします。愛知県刈谷市の清水一将さんは、市内唯一の牧場として小学生の体験や、子牛を小学校に40日間貸し出して飼育させるという画期的な取り組みを続けています。群馬県東吾妻町の富澤裕敏さんは、自給飼料や耕畜連携など、牧場を軸に地域の活性化に力を入れています。

みなさん、生乳生産に加えて、酪農教育ファームの認証牧場として、子どもたちや地域内外に、酪農の価値を伝えています。さらに、進行役のファシリテーターには、酪農教育ファームの実践と研究に長年携わっている横山弘美さんが加わりました。



5組とも酪農×教育ファームに取り組む

“お願い”ではなく、わかり合うために

このフォーラムでは、酪農家の話を聞くだけでなく、参加者がグループごとに意見を書き出す「ホワイトボード・ミーティング®」という手法がとられました。どうしたら酪農・乳業の価値が伝わるのか、そもそも酪農の魅力とは何か、全員が当事者となり、発想から行動までを言語化しようというものです。

こうした参加型の手法を取り入れたのには、わけがありました。会社員時代から、酪農団体に加盟し、様々な形で酪農・乳業の理解醸成活動に関わってきた原さんは、出前授業や牧場体験など、業界が一体となって牛乳の大切さを子どもたちに伝える姿勢に感銘を受けました。一方、中から見た酪農情勢は悪化の一途で、酪農家の減少に歯止めがかかりません。

真の理解醸成のためには、「牛乳を飲もう」や、「酪農家を助けよう」という要請だけではなく、業界の課題を自分ごとにする本質的な理解と、異業種をつなぐコミュニケーションが必要だと感じたのです。

牛を活かすアイデアを出し合うと

もともと原さんが、「うし活」にハマったのは、牛に会うと自分自身が癒され、心を取り戻させてくれる場所だと感じていたからです。また、牛のおもしろさを伝えることが自信にもなっていました。かつての自分のように、都会で働いてストレスを抱えている人に、牛や牧場のことをもっと知ってもらい、理解者を増やすことが、相互の課題解決になると考えたのです。そうした中で、「酪農家を3人以上集めれば、活動を支援する制度がある」と知り、仲間とともにウシノバを起ち上げました。

当日のワークショップでは、様々なアイデアが集まりました。YouTubeで24時間牧場の様子を発信、酪農シミュレーションゲーム、全国牧場ツアー、ミルク列車や空飛ぶミルクフライトなど、様々なイノベーションの種が生まれ、酪農・乳業の夢と可能性が広がりました。

酪農や畜産の世界は、ほかの農業と比べても生産と消費の距離が遠くなりがちです。一方、いのちを伝える教育や知的好奇心を満たす観光など、視点を変えると、牛はかわいく、さわると温かく、人間に心地よい安らぎをもたらします。何よりそれを司る酪農家はうらやむべき職業です。異業種の人たちと牛の価値を語り合うことは、酪農家自身の存在意義を見直すことにもなるかもしれません。



参加者70人がアイデアを出し合う